

3.11東日本大震災の影響 子育て調査

2011年8月31日

Benesse[®]

次世代育成研究所

● 目次 ●

● 調査概要2

震災時の記録 ~生活面~

p.3

- 母親 震災後の情報..... 4
- 母親 震災後の物流..... 5
- 母親 周囲のサポート..... 6
- 子ども 震災後の過ごし方..... 7
- 子ども 外遊びを減らした理由..... 8
- 子ども 震災報道の視聴.....9

震災時の記録 ~子育て面~

p.10

- 母親 子どもへの接し方.....11
- 母親 子育て感情.....12
- 母親 子育てへの考え方.....13
- 母親 生活の心配.....14
- 子ども 高年齢児ストレスサイン.....15
- 子ども 低年齢児ストレスサイン.....16
- 震災をきっかけに親子で話したこと...17

分析まとめ

p.18

- 震災後の母子の心理・状況.....19
- 母親 心配と子育て感情.....20
- 母親 環境と子育て感情.....21
- 母親 大切なサポートとは.....22
- 子ども 母親の感情の影響.....23
- 子ども 遊びの変化とストレス.....24
- 子ども 心を安定させるヒント.....25

調査結果を
振り返って

p.26

ママの
声

「Q. 子育てやお子さまの生活に対するあなたのお気持ちやお考えで、震災後に変わった点があれば教えてください（自由記述）。」に、くださった回答を編集して紹介しています。

● 調査概要 ●

名称	「子育て調査 ～3.11東日本大震災の影響～」							
調査対象	0～5歳児をもつ母親							
調査地域	首都圏：東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県 首都圏及び東北以外の地域：北海道、愛知県、大阪府、兵庫県、福岡県							
有効回答数	3,096サンプル							
		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
	首都圏	258	258	258	258	258	258	1,548
	首都圏及び東北以外の地域	258	258	258	258	258	258	1,548
調査時期	2011年5月27日、28日							
調査方法	インターネット調査							
調査項目	東日本大震災後のお子さまの生活や様子、母親の子育て感情、子どもの将来への期待、生活の不安、情報源、これからの日本が力を入れるべきこと、周囲との関わりなど							

震災時の記録
~生活面~

Benesse[®]

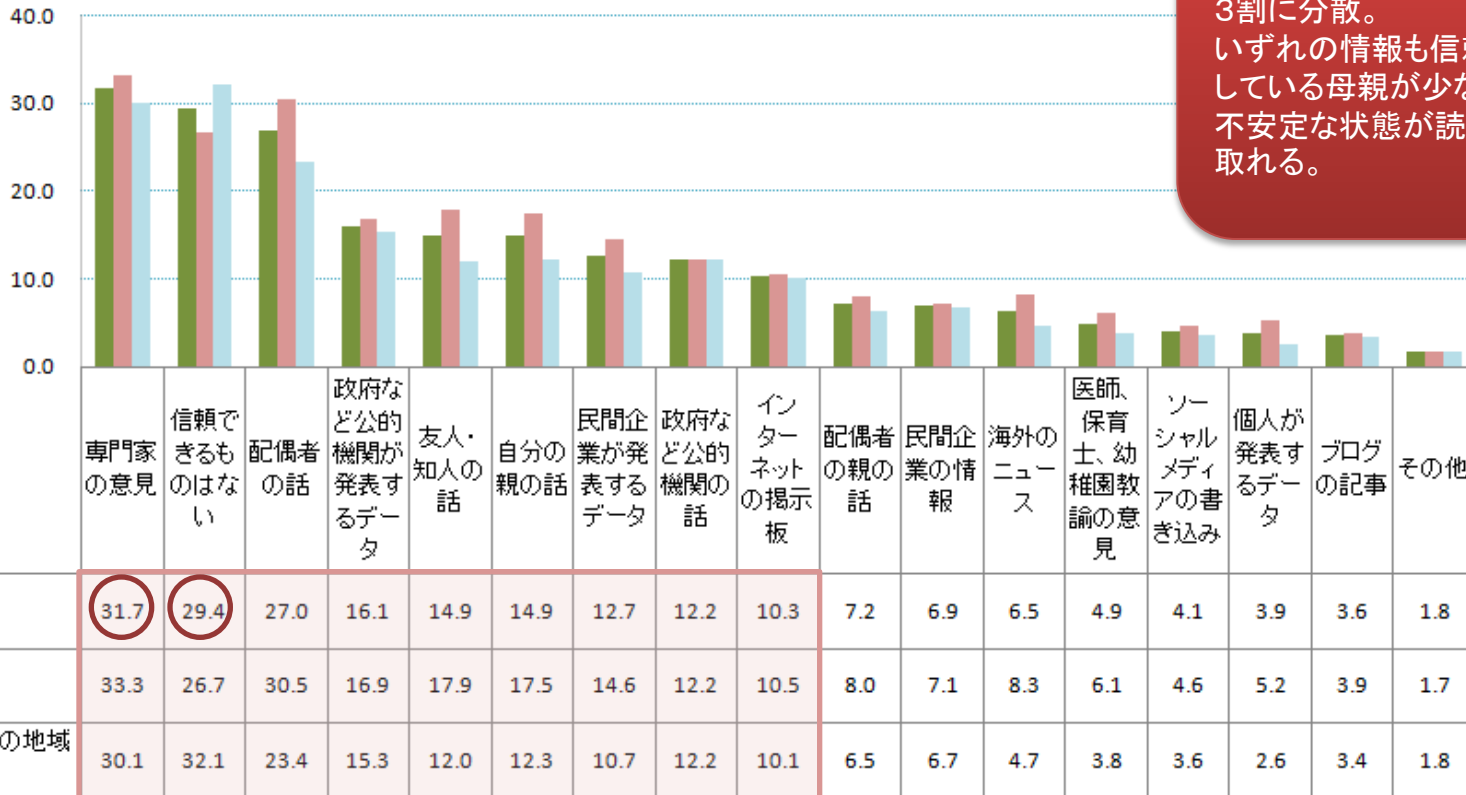
次世代育成研究所

👉 もっとも多かった回答は「専門家の意見」31.7%。

●母親 震災後の情報

Q. 震災・原発事故に関する情報で、あなたが信頼しているものすべてを選んでください。

(%)



上位9項目が、約1～3割に分散。いずれの情報も信頼している母親が少なく、不安定な状態が読み取れる。

※複数回答。



震災前はニュースを鵜呑みにしていたけれど、子どもを守るためには自分自身が何が正しくてどういう行動をとるのか考えなくてはならないと思うようになった。(首都圏_1歳)

正確な情報を得るのが、ものすごく難しいことだと知ったので、何を信用したらいいのか、普段から知っておく必要があると思った。(首都圏及び東北以外の地域_1歳)

👉 頼った先は、「自分の親」49.1%、「配偶者」44.1%。

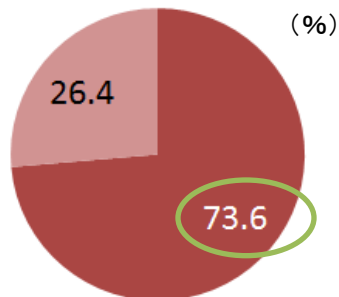
首都圏及び東北以外の地域では、「頼れる人はいたけれど、誰にも頼らなかった」(50.0%)。首都圏より困り具合が小さかったことがうかがえる。

●母親 震災後の物流

Q. 震災直後2週間くらいの状況をお答えください。
水や食料、お子さまの衛生用品やその他日用品がいつものように手に入らず困ったことがありますか。

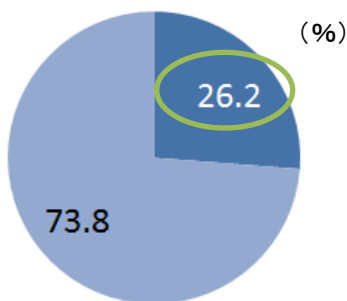
■はい ■いいえ

首都圏 (1,548)



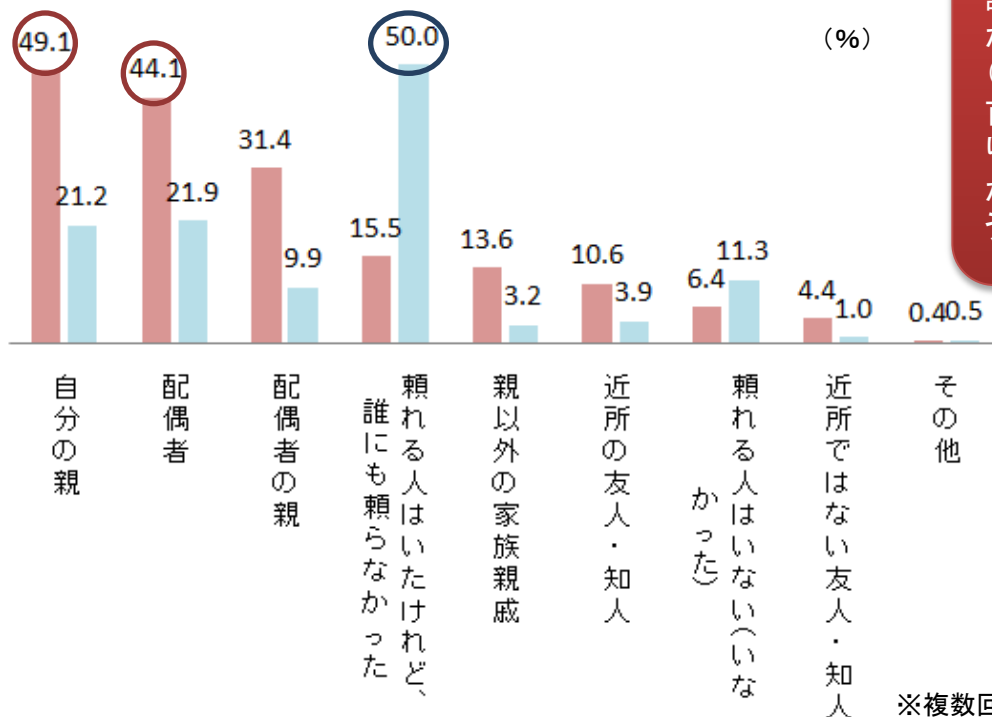
■はい ■いいえ

首都圏及び東北以外の地域 (1,548)



Q. 震災直後2週間くらいの状況をお答えください。
水や食料、お子さまの衛生用品やその他日用品がいつものように手に入らず困った時、頼った人すべてを選んでください

■首都圏(1,140) ■首都圏及び東北以外の地域(406)



ママの声

震災前までは食料を備蓄していなかったが、子どもが不自由しないよう、ある程度備蓄しなければならなかったと感じた。(首都圏_2歳)

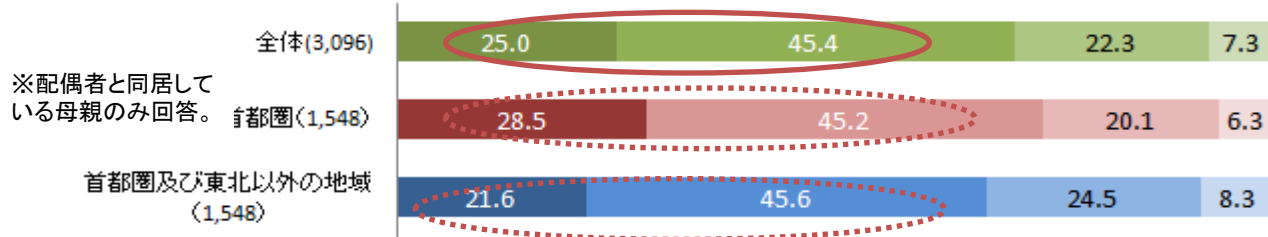
震災時の救援物資として、ベビー用品がなかなか届かない事実を知り、社会的に小さな子どもが後回しにされているようで、とても悲しく感じた。(首都圏及び東北以外の地域_1歳)

☞ 祖父母に子どもを預かってもらうことがある 69.6%、地域に子どもを預けられる人がいる 52.7%。

●母親 周囲のサポート

Q. 配偶者に関して、あなたは次のことをどう思いますか。それぞれお答えください。
震災・原発事故への対応を一緒に考えてくれる

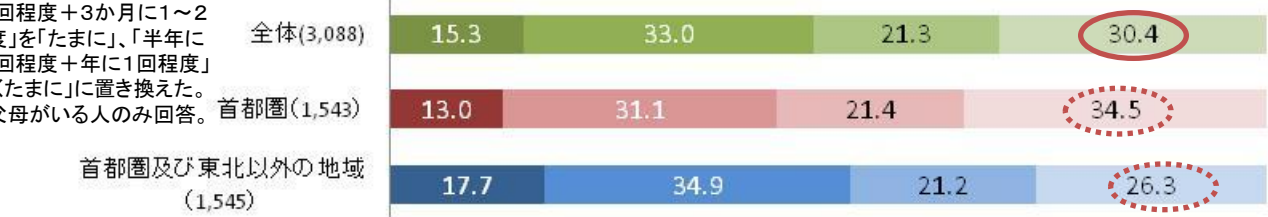
■とてもそう思う ■まあそう思う ■あまりそう思わない ■ぜんぜんそう思わない



Q. お子さまの祖父母からの手助け状況を教えてください。父方か母方かは区別せずに、どちらの祖父母からの手助けも合算してお答えください。
お子さまを預かってもらう

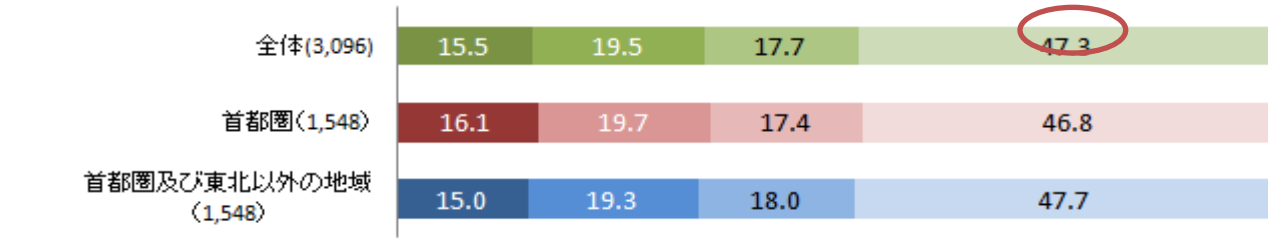
※「ほとんど毎日+週に1~2回程度」を「日常的に」、「月に1~2回程度+3か月に1~2回程度」を「たまに」、「半年に1~2回程度+年に1回程度」を「ごくたまに」に置き換えた。
※祖父母がいる人のみ回答。首都圏(1,543)

■日常的に ■たまに ■ごくたまに ■まったくくない



Q. 地域の中で、お子さまを通じたお付き合いの状況を教えてください。それぞれお答えください。
お子さまを預けられる人

■3人以上いる ■2人くらいはいる ■1人はいる ■1人もいない



夫が「震災・原発事故への対応を一緒に考えてくれる」に、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した母親は、首都圏で73.7%、首都圏及び東北以外の地域で67.2%で、首都圏のほうが6.5ポイント高い。

一方、祖父母に「お子さまを預かってもらう」ことが「まったくくない」と回答した母親は、首都圏で34.5%、首都圏及び東北以外の地域で26.3%で、首都圏のほうが8.2ポイント高い。

地域の中に、「お子さまを預けられる人」が、「1人もいない」と回答した母親の比率に地域差はみられなかった。



自分の親以外に子供を気にかけてくれる地域の方を増やしたいと思うようになった。(首都圏_5歳)

☞ 震災直後の首都圏では「屋外遊び」「友だちと遊ぶ時間」が減り、「屋内遊び」「おうちの方と遊ぶ時間」が増えた。

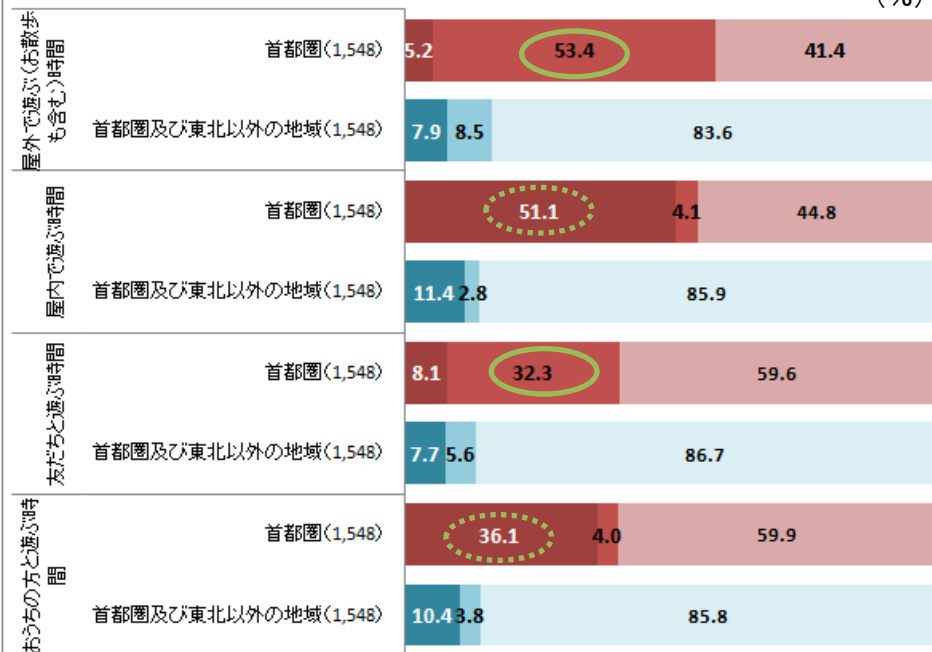
●子ども 震災後の過ごし方

震災直後2週間

Q.東日本大震災(以下、震災)発生(3月11日)以前と、震災直後2週間くらいを比較してお答えください。
お子さまの過ごし方で、次の時間どのような変化がみられましたか。それぞれお答えください。
※幼稚園・保育園 其他の園・施設に通われている場合は、幼稚園・保育園 其他の園・施設以外での生活についてお答えください。

■ 増えた ■ 減った ■ 変わらない(震災以前からこの過ごし方をしていない場合も含む)

(%)

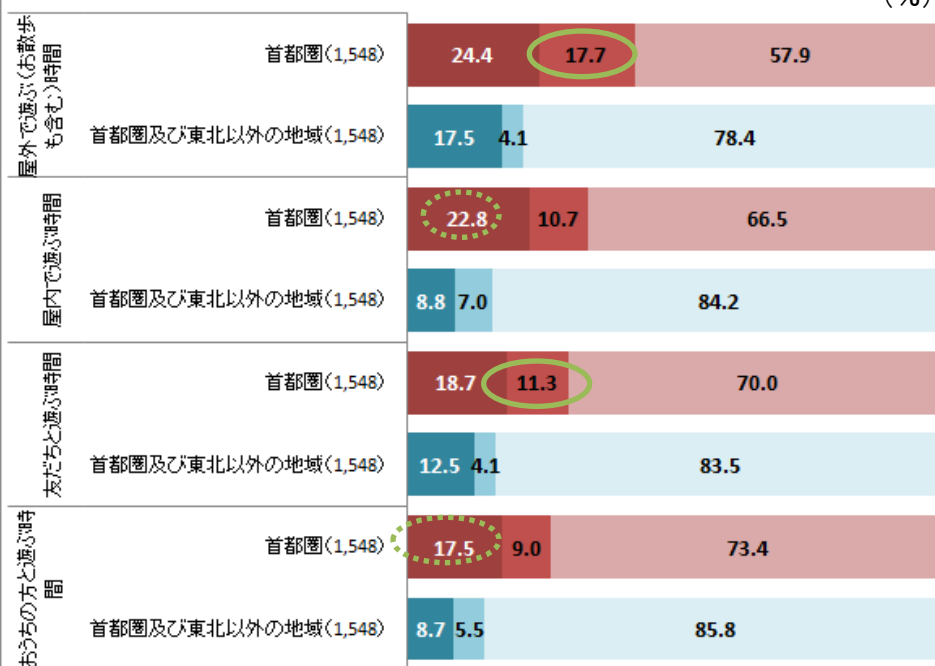


調査時点(2011年5月)

Q.東日本大震災(以下、震災)発生(3月11日)以前と、最近2週間くらいを比較してお答えください。
お子さまの過ごし方で、次の時間どのような変化がみられましたか。それぞれお答えください。
※幼稚園・保育園 其他の園・施設に通われている場合は、幼稚園・保育園 其他の園・施設以外での生活についてお答えください。

■ 増えた ■ 減った ■ 変わらない(震災以前からこの過ごし方をしていない場合も含む)

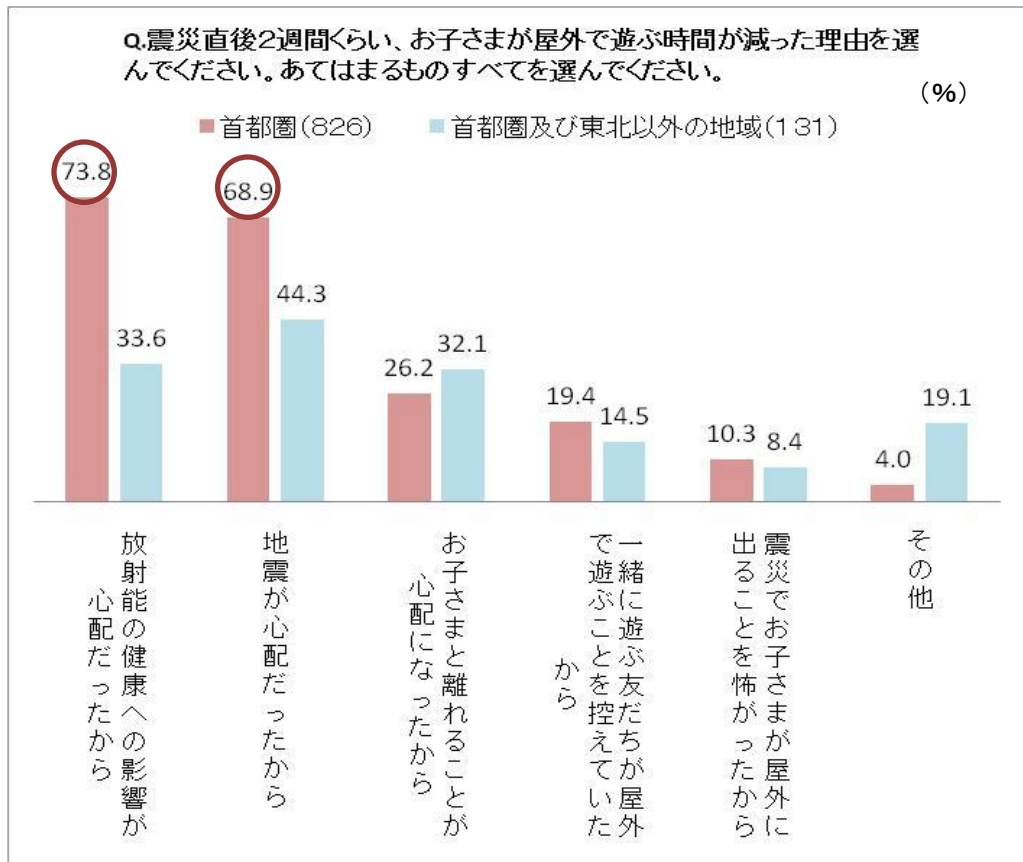
(%)



首都圏では、震災から2か月が経過した調査時点でも、外遊びが「減った」(17.7%)、屋内遊びが「増えた」(22.8%)と、約2割の子どもが、外遊びを減らし、屋内遊びを増やしていた。

☞ 首都圏では、「放射線の健康への影響」と「地震」がそれぞれ7割前後。

●外遊びを減らした理由



※複数回答。
※震災発生以前と、震災直後2週間くらいを比較して、「屋外で遊ぶ(お散歩も含む)時間」が「減った」と回答した人のみ回答。
※調査票では回答者の分かりやすさに配慮し、「放射線」を「放射能」と表現した。

外遊びを減らした理由は、首都圏、首都圏及び東北以外の地域ともに、放射線と地震の心配が上位にくるが、首都圏のほうが数値が高い。

また、ママの声をみると、外遊びさせている母親も、放射線の影響を心配しながらであることがうかがえる。

ママの声

戸外での遊びに関して、とても心配です。たとえ大気中の放射性物質の量が基準値以下だとしても、地面に近いところで砂遊びや虫探しなどをして遊んでいる子どもたちは、親が思っている以上に被曝しているのではないかと気になります。(首都圏_3歳)

今しかできない外遊びを存分にさせてあげたいけれど、やっぱり放射線の影響は気になります。以前、雨あがりの泥遊びは楽しい時間だったのに、今は裸足になってキラキラした顔で泥遊びをする我が子を見て不安な気持ちになります。(首都圏及び東北以外の地域_3歳)

👉 **子どもに震災報道をみせないよう配慮した母親は、12.2%。**
(子ども向け番組をみせることが多くなった6.9% + テレビを消して過ごした5.3%)

●子ども 震災報道の視聴

Q.震災直後2週間くらいの状況をお答えください。

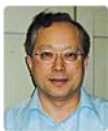
テレビの震災関連の報道を視聴していた状況について、もっとも近いもの1つを選んでください。

- お子さまと一緒に部屋で、震災関連の報道をみていた
- お子さまが震災関連の報道を嫌がったので、子ども向け番組(録画、DVDなど)をみせることが多くなった
- お子さまに震災関連の報道をみせるのはよくないと思い、子ども向け番組(録画、DVDなど)をみせることが多くなった
- お子さまが震災関連の報道を嫌がったので、できるだけテレビは消して過ごした
- お子さまに震災関連の報道をみせるのはよくないと思い、できるだけテレビは消して過ごした
- もともとテレビはみない(家にも含む)ので、テレビは消して過ごした

(%)



震災報道の視聴スタイルは、首都圏と首都圏及び東北以外の地域を比べて、いずれの項目も地域差がみられない。



榊原洋一先生(お茶の水女子大学大学院教授)は、絵本などで培ってきた子どもの美しい世界観を守るために、震災などの被害を映し出すメディアはできるだけみせないでほしい、と指摘します。

震災時の記録
~子育て面~

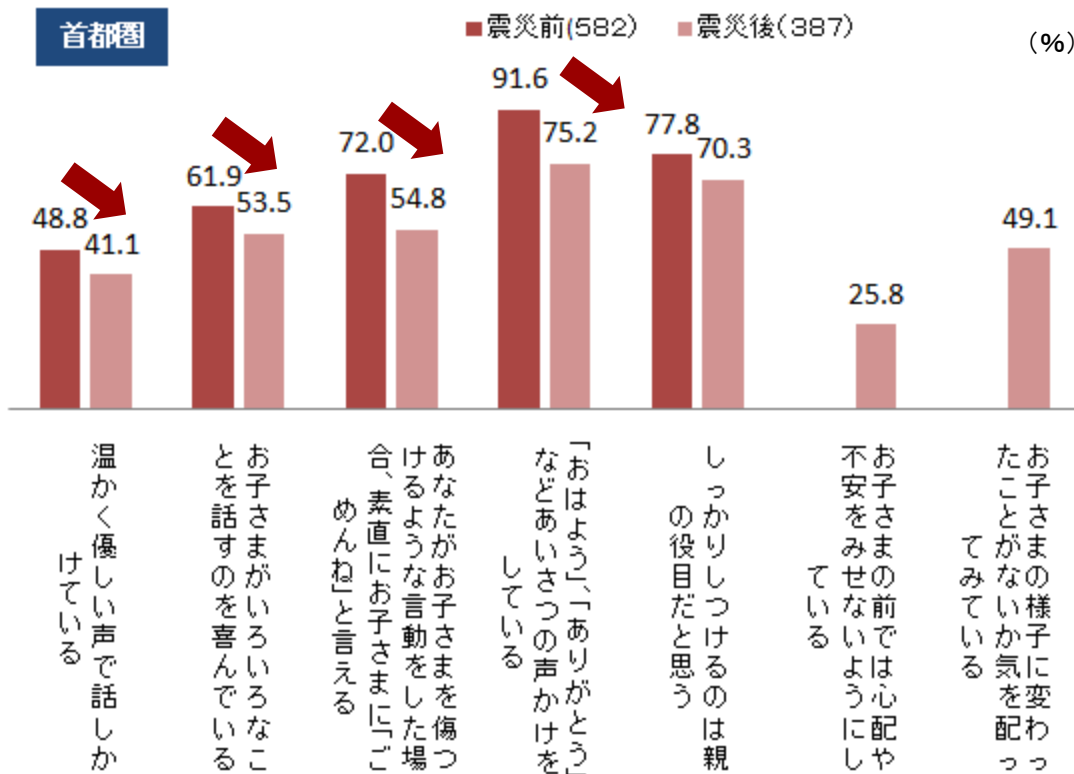
Benesse®

次世代育成研究所

👉 0～2歳児をもつ母親の養育行動が、いずれの項目も震災前より低下。

●母親 子どもへの接し方

Q. あなたはお子さまの育てについて、どのように考えたり、行動したりしていますか。



「温かく優しい声で話しかけている」、「あいさつの声かけをしている」など、温かい態度で子どもに接しているかどうかをたずねる項目について、「あてはまる」と答えた母親が、約7～16ポイント減少している。

ママの声

震災以来、イライラすることが増えてしまって、子どもにあたるようになってきてしまいました。反省しているのにまたイライラしてしまう。そんな自分が自分でいやになります。(首都圏_0歳)

※「あてはまる」の%。
 ※0～2歳の第1子をもつ母親の回答を分析。
 ※震災前の首都圏とは、「第1回妊娠出産子育て基本調査」(2006年11月 ベネッセ次世代育成研究所実施)の結果。
 ※調査方法は異なるが、回答者の在住地域、子どもの年齢をあわせて比較した(比較数値は参考データ)。

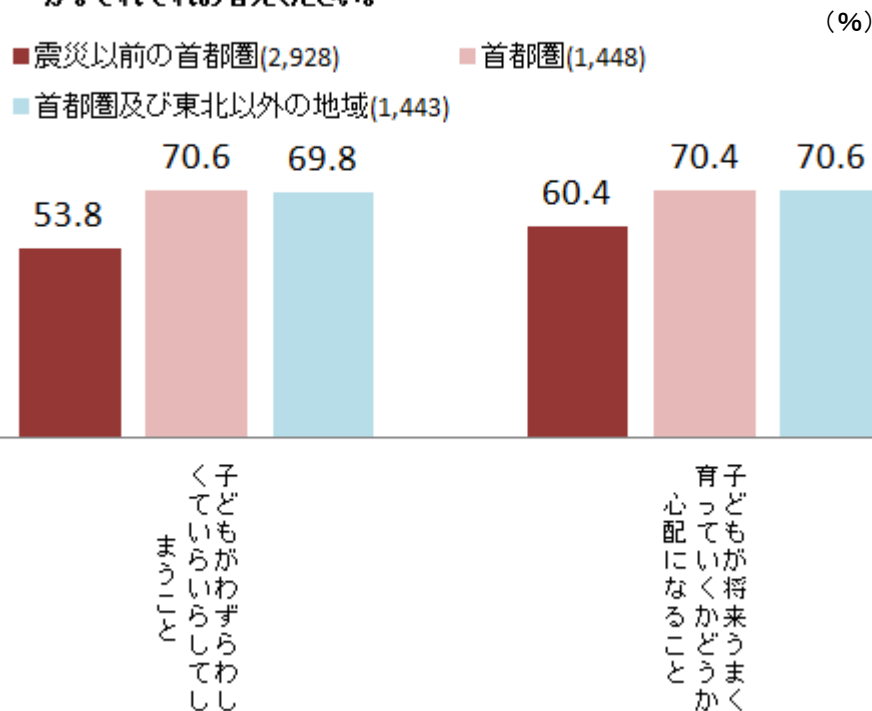


菅原ますみ先生(お茶の水女子大学大学院教授)は、震災や原発事故から子どもの命を守る、という大きなミッションが発生したために、母親たちに普段の余裕がなくなっているのでは、と指摘します。

首都圏、首都圏及び東北以外の地域ともに、「子どもがわずらわしくていらいらする」ことがある母親が約7割。

●母親 子育て感情

Q.あなたは、最近、子育てについて次のようなことを感じることがありますか。それぞれお答えください。



首都圏では、「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」が「よくある」「時々ある」と回答した母親は、調査時点(2011年5月末)は70.6%で震災前より16.8ポイント、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」は70.4%で震災前より10.0ポイント増加している。

ママの
声

元気で生きてくれればそれだけでいい。とは思いつつも、すごく夜泣きされたりするとイライラしてしまう。それも贅沢な悩みなんだろうな、とも思うのですが。
(首都圏_0歳)

これから数十年後、子どもを取り巻く環境について、漠然と不安を抱くようになった。放射線のどんな影響が出てくるのか怖い。
(首都圏及び東北以外の地域_0歳)

※「よくある」+「時々ある」の%。
※0歳6か月～5歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
※12項目のうち、2項目を抜粋。
※震災以前の首都圏とは、「第4回幼児の生活アンケート」(2010年3月、首都圏の0歳6か月～6歳就学前の子どもをもつ保護者を対象に実施)の結果。



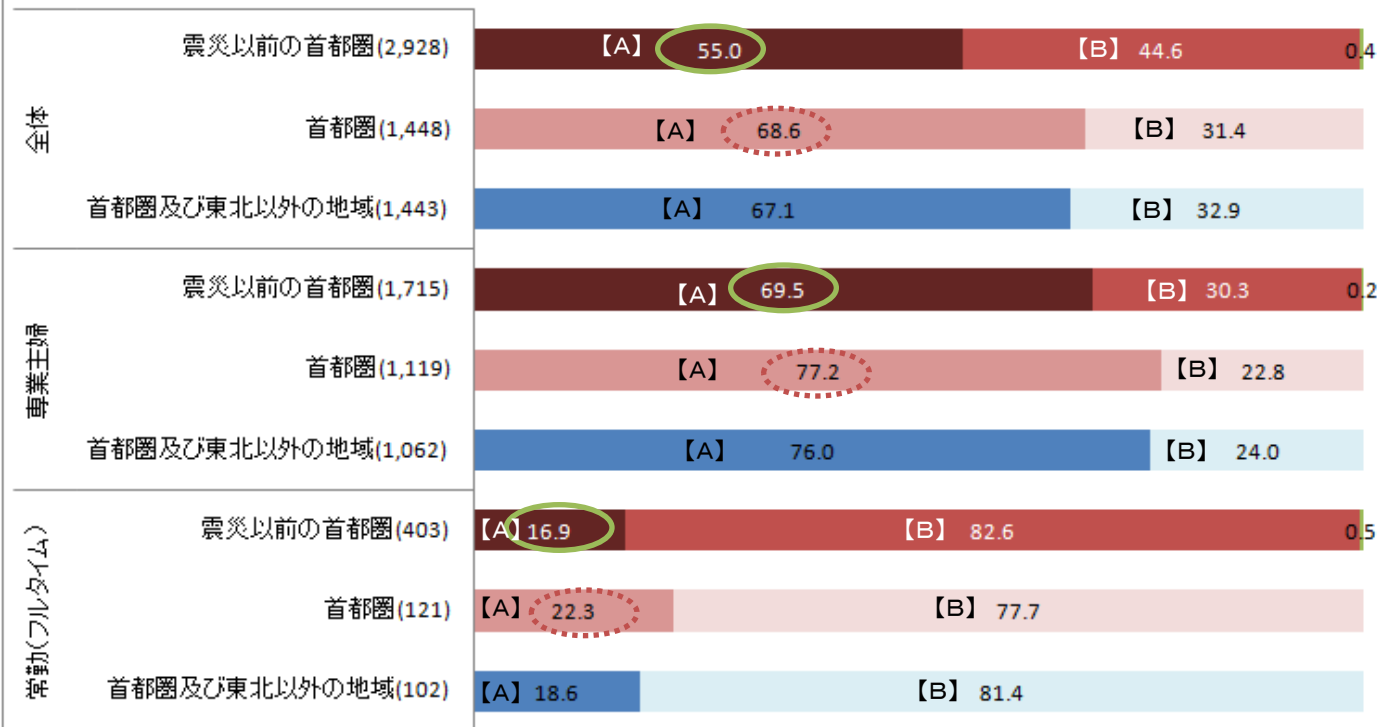
汐見稔幸先生(白梅学園大学学長、東京大学名誉教授)は、今回の震災は人間の心の、魂の深いところに衝撃を与えるものであり、母親の気持ちも通常に戻るまで時間がかかるだろう、と指摘します。

「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がよい」と考える母親が、首都圏で13.6ポイント増加。

●母親 子育てへの考え方

Q. 子育てに関するAとBの2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近い方はどちらですか。

- 【A】：子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がよい
 - 【B】：母親がいつも一緒になくても、愛情をもって育てればよい
 - 無答不明
- (%)



「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がよい」と考える母親の比率は、首都圏と首都圏及び東北以外の地域で差はない。また、震災以前と比べて首都圏では、専業主婦の母親、常勤の母親ともに、高まっている。



今はまだ仕事をするより可能な限り子どもの側にいたいと思った。

側にいて子どもを守ることが自分の仕事だと思う。(首都圏_5歳)

震災後に育児休暇が明け、仕事復帰をしていますが、出来ることならずっと一緒にいたい気持ちが高まっています。(首都圏及び東北以外の地域_2歳)

※0歳6か月～5歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。

※9項目のうち、1項目を抜粋。

※震災以前の首都圏とは、「第4回幼児の生活アンケート」(2010年3月、首都圏の0歳6か月～6歳就学前の子どもをもつ保護者を対象に実施)の結果。無答不明があるため、AとBの意見の数値を合計しても100%にならない。

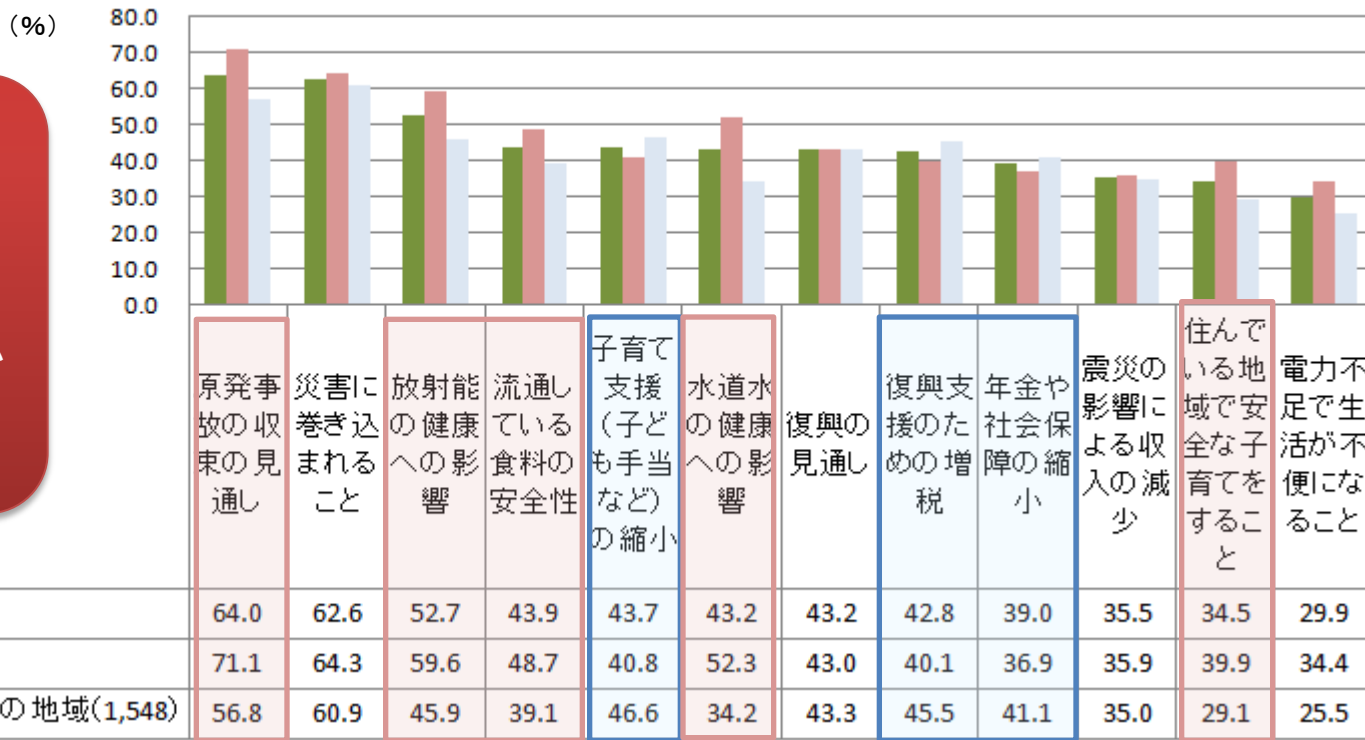
首都圏と首都圏及び東北以外の地域の母親のほうが、子育て支援や社会保障の縮小、増税への心配が大きい。

●母親 生活の心配

首都圏のほうが5ポイント以上高い項目

首都圏及び東北以外の地域のほうが
5ポイント以上高い項目

Q. これからの生活を考えるにあたり、次のことをどのくらい心配していますか。それぞれお答えください。



いずれの項目も、「とても心配だ」と答えた比率が、約3割を超える。

母親たちにとって、心配が多い状態であることがわかる。

※「とても心配だ」の%。



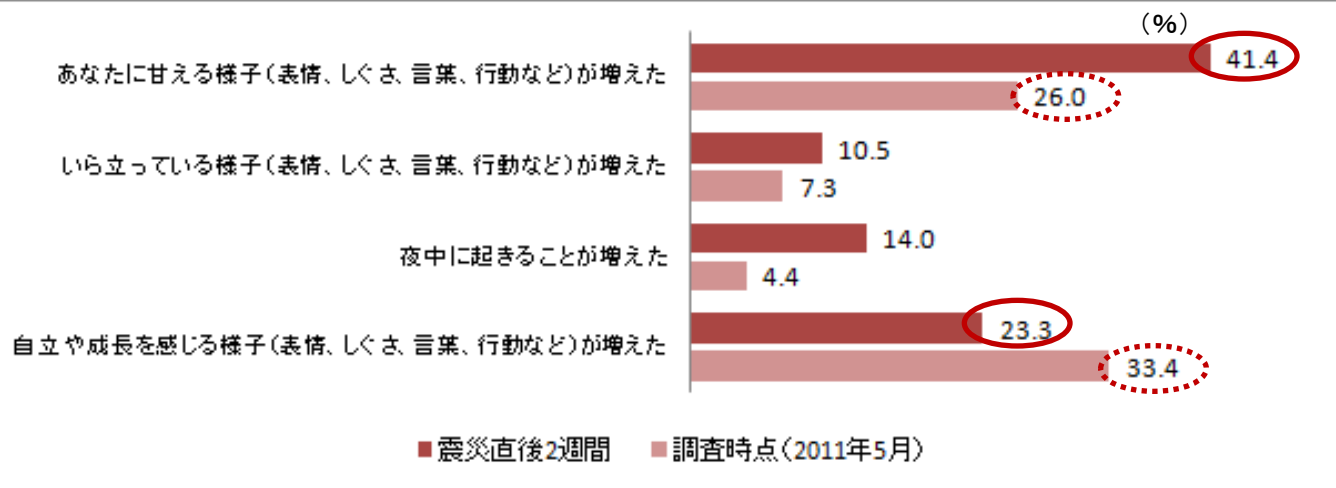
環境に不安因子が出てきたことについては悲しく思う。国の将来を支える子ども達への影響を最小限にするために、今できることをすべてするべきだと思う。(首都圏_3歳)

被災された方には申し訳ないけれど、もし子ども手当が廃止されると現実的に厳しい。何もかもを震災復興に回されると、生活できなくなる人もいる、ということも知ってもらいたい。(首都圏及び東北以外の地域_2歳)

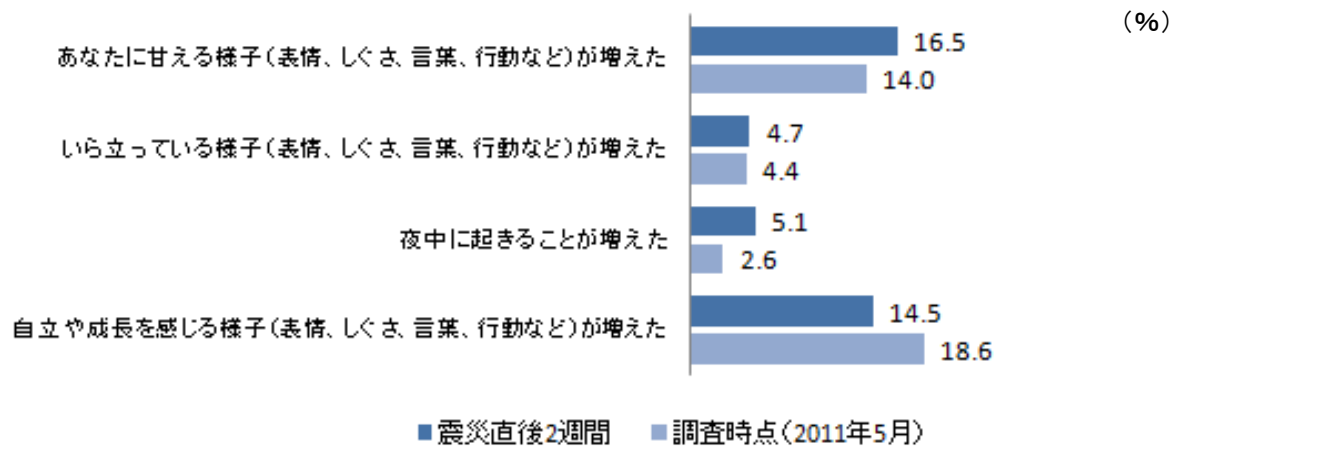
☞ 首都圏で、甘えの様子が増えた子どもは、震災直後 41.4%から調査時点では26.0%に減少。

●子ども 高年齢(3~5歳)児 ストレスサイン

Q. 震災の影響で、お子さまの次のような言動の変化がみられましたか。それぞれお答えください。



心身共に健やかに育つよう、以前より心を砕くようになった。特に、震災後、赤ちゃんかえりしていたので、子どもの心の動きにより配慮するよう気を付けている。(首都圏_4歳)



ストレスサインは、首都圏及び東北以外の地域より、首都圏のほうが多くみられている。

一方、震災の影響で自立や成長を感じる様子は、震災後2か月で増えており、こちらも首都圏のほうが多くみられている。

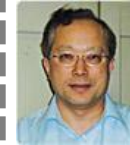
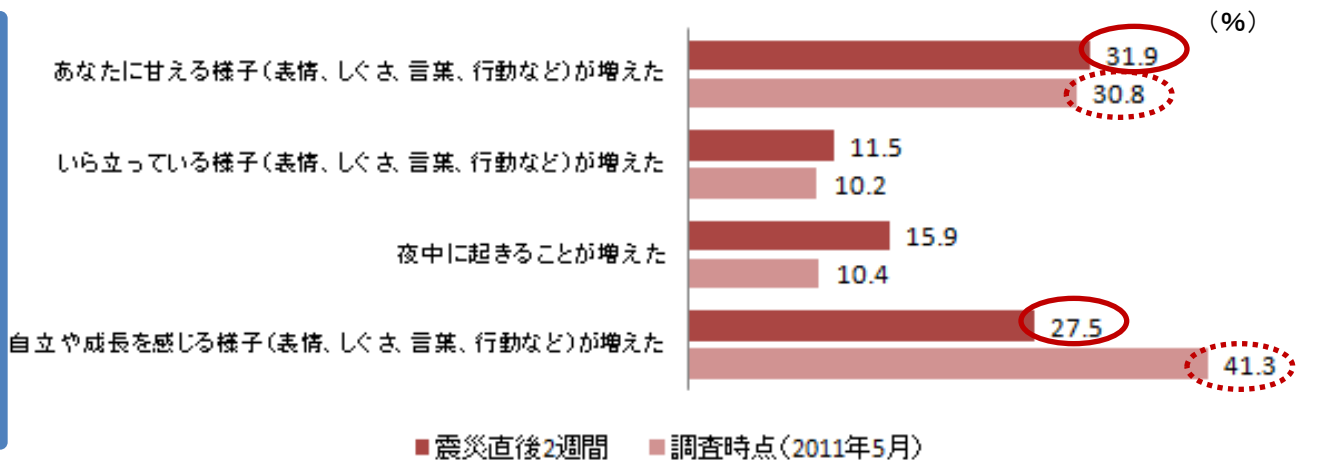
※「とてもあてはまる」+「ややあてはまる」の%。

※10項目のうち、4項目を抜粋。

☞ 首都圏で、甘えの様子が増えた子どもは、震災直後 31.9%から調査時点では30.8%とほとんど変わらない。

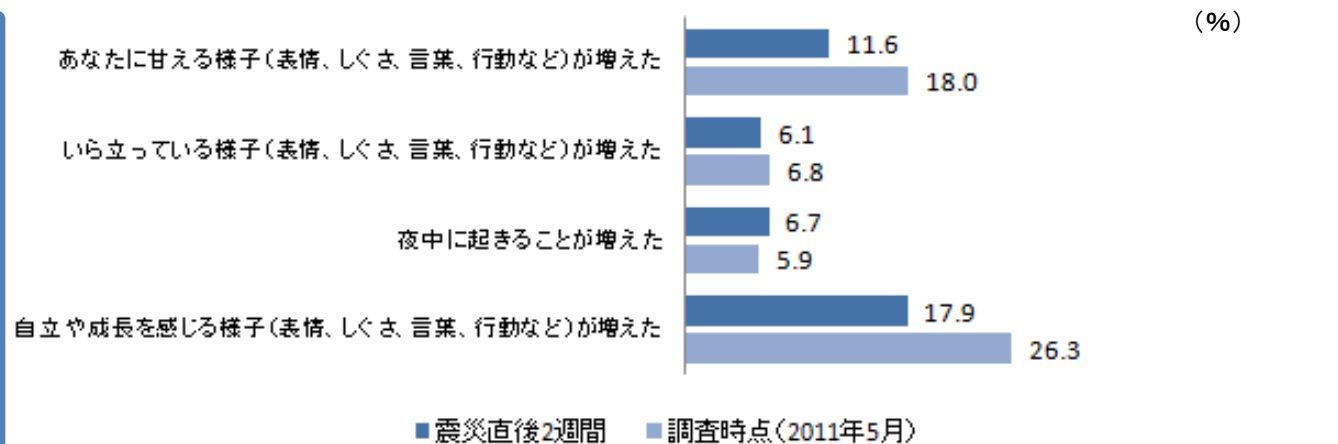
●子ども 低年齢(0～2歳)児 ストレスサイン

Q. 震災の影響で、お子さまの次のような言動の変化がみられましたか。それぞれお答えください。



榊原洋一先生（お茶の水女子大学大学院教授）の解説

低年齢の子どものほうがストレス反応が深刻である、というのは過去の事例からも明らかで科学的根拠があります。3歳以上の子どもは、大きな地震が起こって大変なことがあったんだ、という程度のストーリーがわかるため、震災直後は退行や睡眠障害が出やすいですが、事態が落ち着くにつれそのことも理解できるので、症状も治まったと考えられます。一方、2歳以下の子どもは、何が起こったか理解する力はまだありません。震災直後の周囲の不安定な状況を感じ取った子どもは、調査時点でもそのことを理解できず、不安が残ったままなのでしょう。



※「とてもあてはまる」+「ややあてはまる」の%。
※10項目のうち、4項目を抜粋。

ストレスサインは、首都圏及び東北以外の地域より、首都圏のほうが多くみられている。一方、震災の影響で自立や成長を感じる様子は、震災後2か月で増加しており、こちらも首都圏のほうが多くみられている。

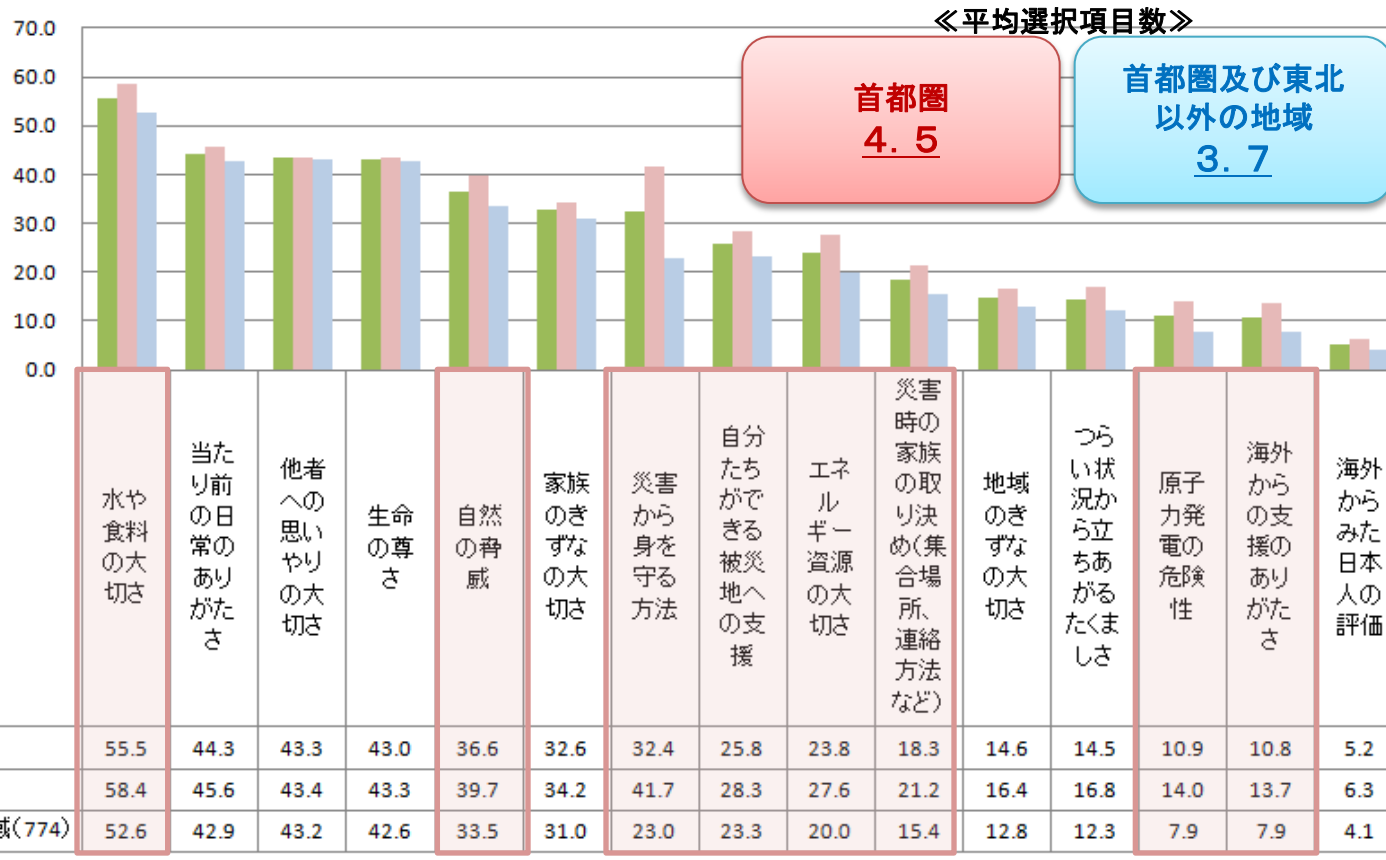
いずれの項目も、首都圏及び東北以外の地域の母親より、首都圏の母親のほうが「すでに話した」比率が高い。

●子ども高年齢(3～5歳)児 震災をきっかけに親子で話したこと

首都圏のほうが5ポイント以上高い項目

Q. 今回の震災をきっかけに、次のことについてお子さまと話していますか。

(%)



ママの声

水を飲んだり、電気がついたり、外で遊んだり、当たり前前にできていたことに感謝するようになりました。子ども達も水や電気の大切さを身に染みて分かったような気がします。(首都圏_4歳)

※「すでに話した」の%。

話した内容は、水や食料、当たり前の日常、他者への思いやり、生命の大切さが上位にきており、震災を機に改めて大切なことを話し合った母子が多い様子である。

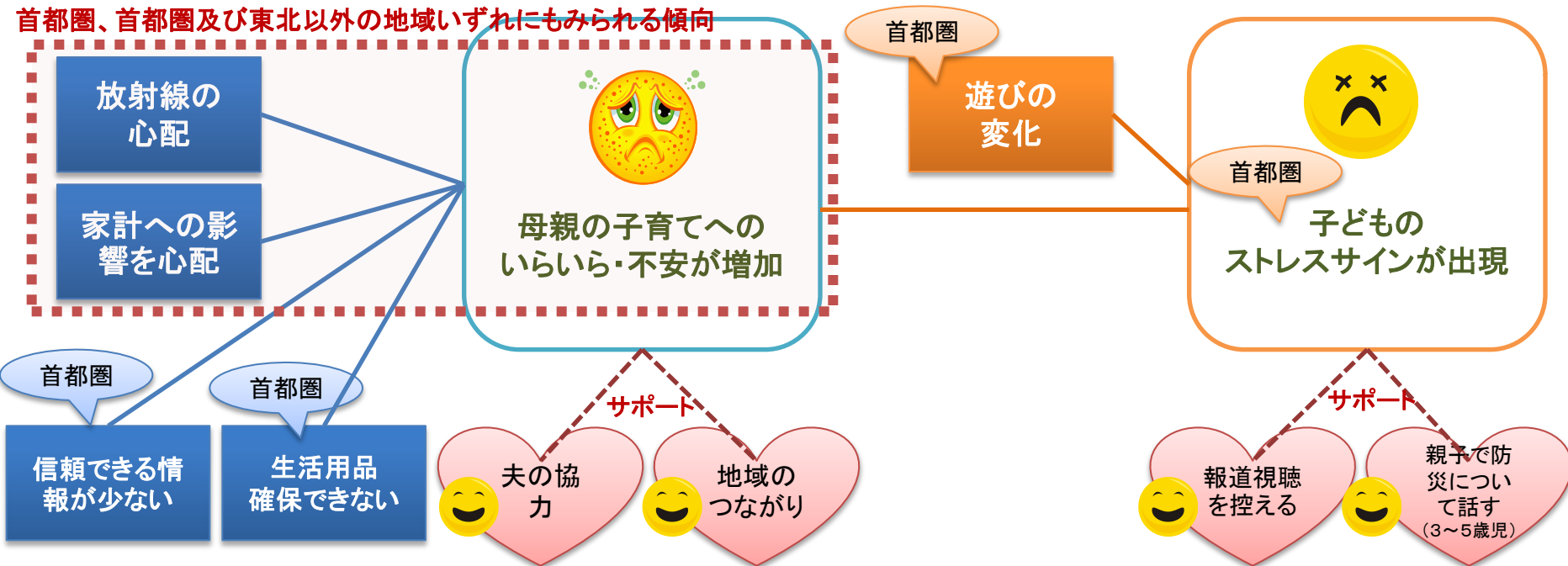
分析まとめ

Benesse[®]

次世代育成研究所

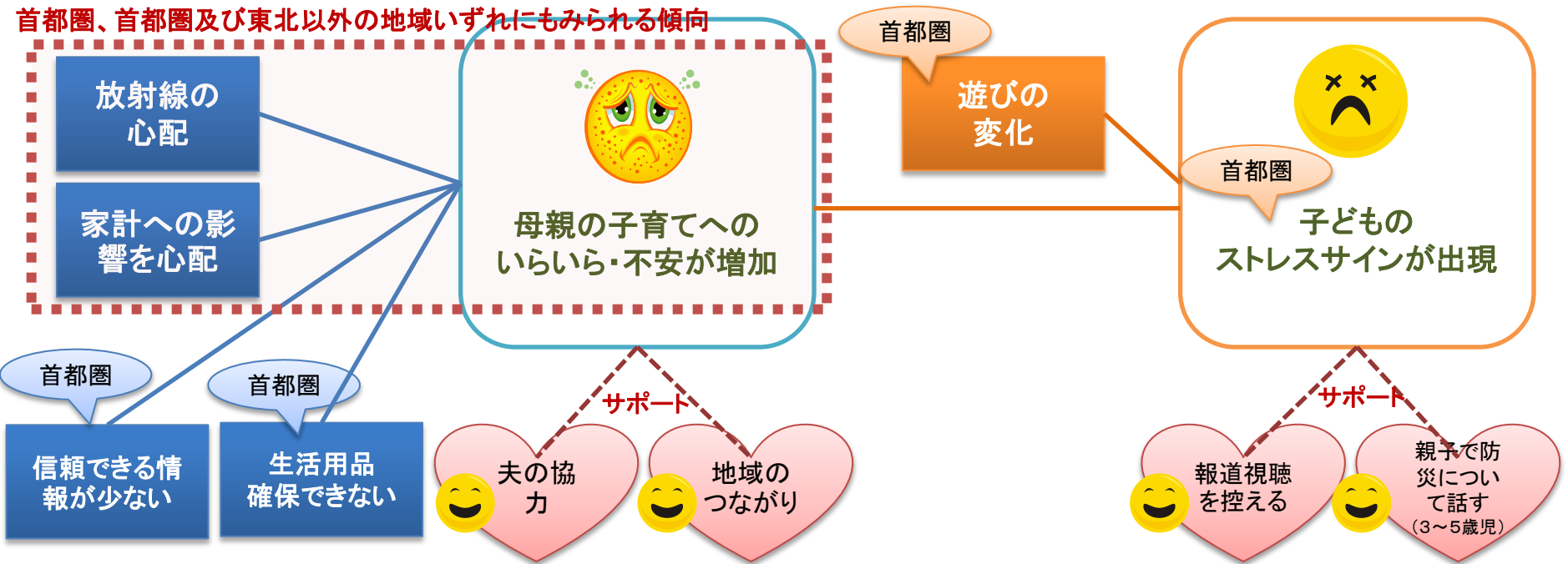
☞ 震災後、放射線の健康被害や家計への心配、さらに首都圏では、信頼できる情報の少なさや生活用品の確保困難が要因となって、母親のいらいら・不安が増加。そういった母親の状況や、外遊びの減少など遊び環境が変化したことが要因となって、首都圏では子どものストレスサインがみられた。
 そのような状況の中、夫の協力や地域のつながりがある母親のほうが、いらいら・不安を増加させていない傾向がある。また、子どもの震災報道の視聴を控えたり、親子で防災について話し合ったほうが、子どものストレスがみられなくなる傾向がある。

首都圏、首都圏及び東北以外の地域いずれにもみられる傾向



大日向雅美先生（恵泉女学園大学大学院教授 子育てひろば「あい・ぽーと」施設長）の解説
 信頼できる情報が十分でない中で、食料や外遊びなどについて『子どものために間違った選択ができない』という不安感から、母親のストレスが増加したのでしょう。また、震災・原発事故の対応を夫が協力してくれたり、地域のつながりがある母親のほうがストレスが少ない傾向から、日ごろからネットワークを持ち、社会的サポートを確保しておくことは、非常時への備えとして大切なことだと言えます。安全・安心を優先する社会を築くには、防災対策など物質的なことがもちろん大切ですが、安心できる人的ネットワークなど目に見えないものも忘れてはならないでしょう。

● 「3.11東日本大震災の影響 子育て調査」 ●



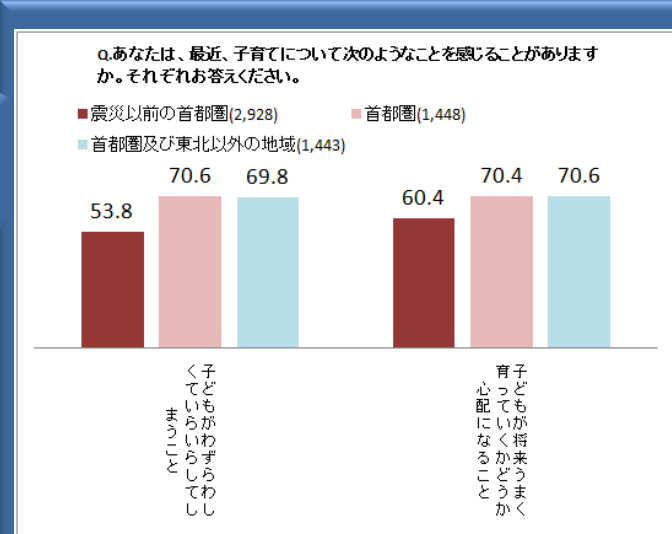
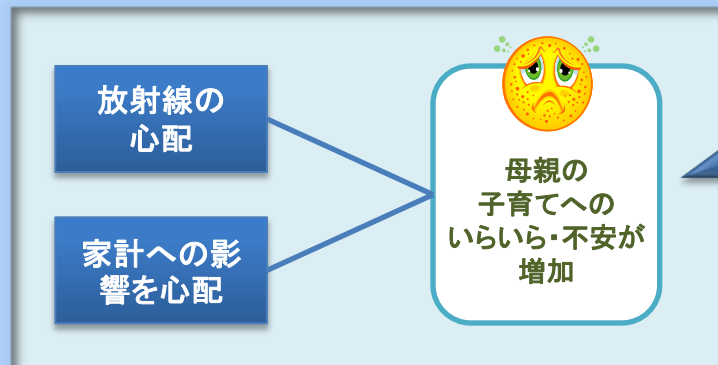
この図式のつながりをひとつずつ、
次のページから検証していきます。

Benesse®

次世代育成研究所

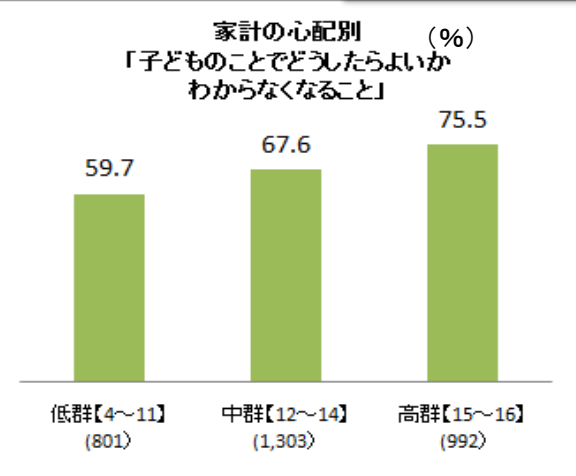
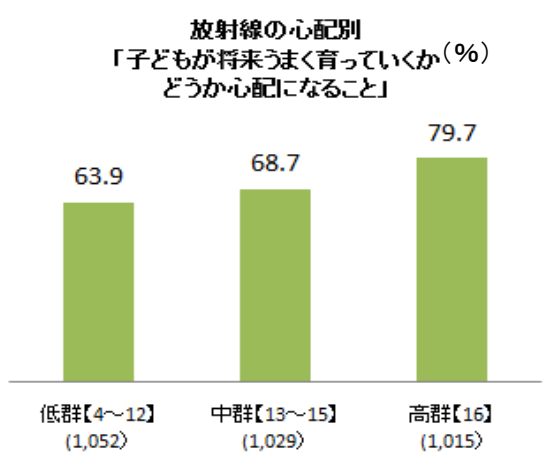
この傾向は、首都圏、首都圏及び東北以外の地域いずれにもみられる。

●母親 心配と子育て感情



首都圏では震災以前と比較して、母親のいらいらや子どもへの将来不安が高まっている傾向がみられた。(12シート参照)

Q.あなたは、最近、子育てについて次のようなことを感じることはありますか。それぞれお答えください。



原発事故や放射線の健康への影響を心配についてたずねた項目を得点化し3つの群にわけ「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」が「よくある」「時々ある」と答えた母親をみると、心配が大きくなるにつれて子どもの将来への不安も大きくなる傾向が分かった。震災の影響による収入減少や社会保障縮小など家計の影響に対する心配についてたずねた項目についても同様に分析したところ家計の心配が大きいほど、「子どものことでどうしたらよいかわからなくなること」も多い傾向が分かった。

※「よくある」+「時々ある」の%。
※「放射線の心配」、「家計への影響を心配」はこれから先の生活への心配をたずねた設問のなかで、それぞれに該当する項目への回答を得点化し、各群のサンプル数がおよそ3分の1になるようにわけた。【】内は各群の得点分布。
※調査票では回答者の分かりやすさに配慮し、「放射線」を「放射能」と表現した。

この傾向は、首都圏にみられる。

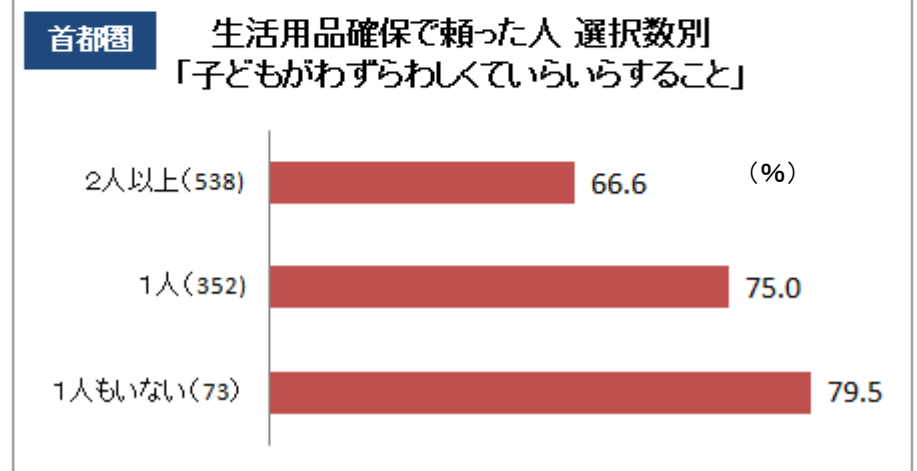
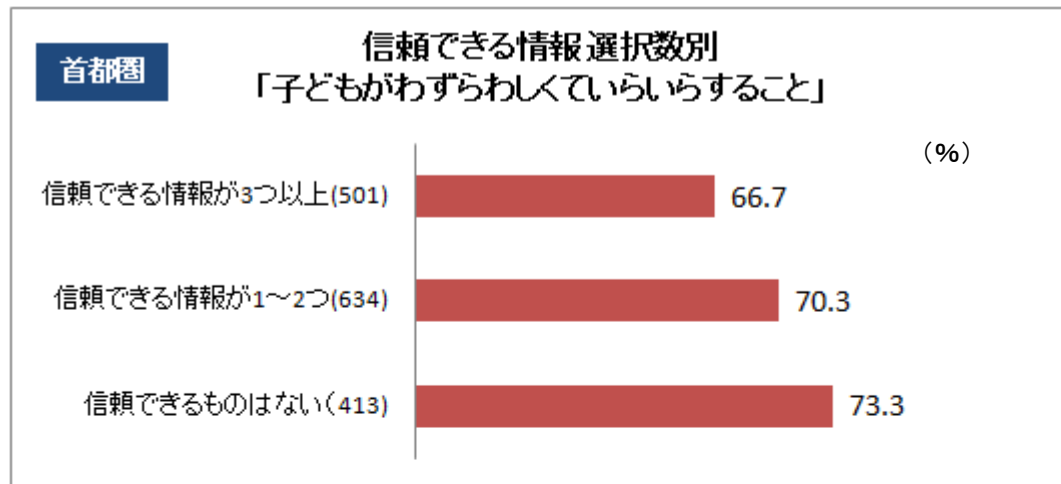
●母親 環境と子育て感情



「子どもがわずらわしくていらいらすること」が「よくある」「時々ある」と回答した割合は、首都圏では信頼できる情報の数少なくなるにつれ、増加する傾向があった。同様に、生活用品の確保が困難な際に頼った人が少なくなるにつれ、増加する傾向もみられた。

一方、首都圏及び東北以外の地域では信頼できる情報の数や頼った人の数によって、母親のいらいらに差はみられなかった。

Q. あなたは、最近、子育てについて次のようなことを感じることがありますか。それぞれお答えください。



※「よくある」+「時々ある」の%。

※「信頼できる情報数」「生活用品確保で頼れる人数」は、震災・原発事故に関する情報で、信頼しているもの、食料や日用品が手に入らず困ったとき頼った人について複数回答でたずねた結果、選択した項目数で各群にわけた。

この傾向は、首都圏、首都圏及び東北以外の地域いずれにもみられる。

●母親 大切なサポートとは

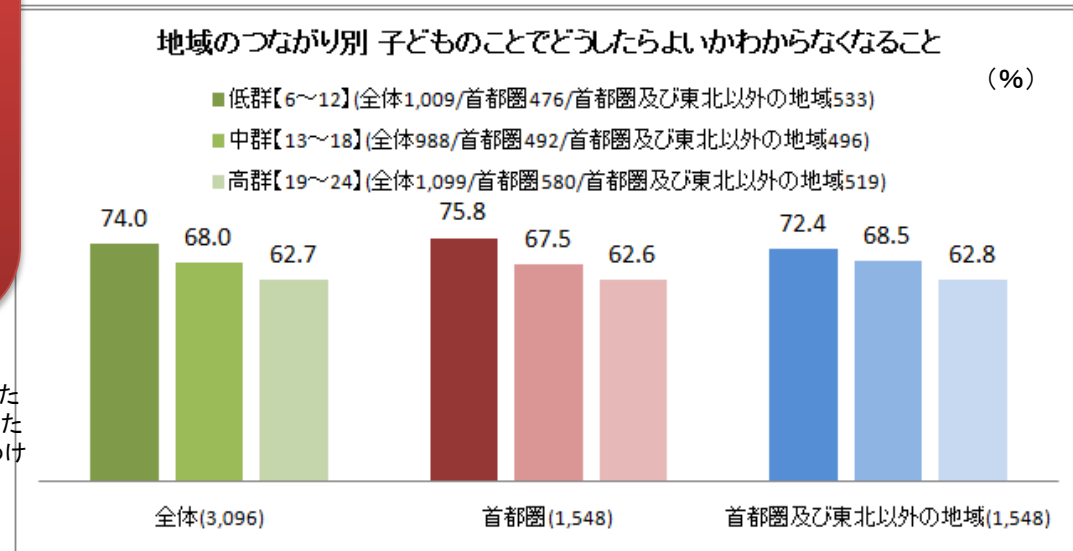
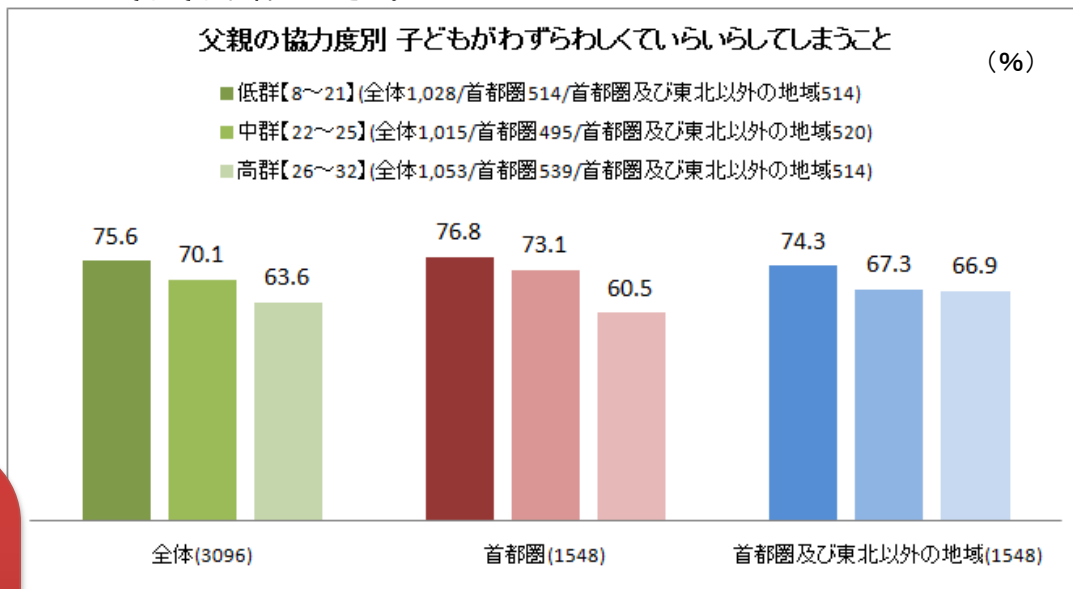


子どもの父親が子育てに理解を示したり協力しているかを得点化し3つの群にわけ、「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」が「よくある+時々ある」と答えた母親をみたところ、協力度が高くなるにつれてわずらわしくていらいらすることが少ない傾向が分かった。

地域のつながりについても同様に分析したところ、地域のつながりが多いほど、「子どものことでどうしたらよいかわからなくなること」が少ない傾向が分かった。

以上の結果から、父親の協力や地域のつながりが多い母親のほうが、子育てへのいらいらや不安が抑えられていることがわかった。

Q. あなたは、最近、子育てについて次のようなことを感じることがありますか。それぞれお答えください。



※「よくある」+「時々ある」の%。

※「父親の協力度」は配偶者(子どもの父親)の回答者への理解・協力度をたずねた設問、「地域のつながり」は地域の中で子どもを通じたお付き合いの状況を尋ねた設問に対する回答を得点化し、各群のサンプル数がおよそ3分の1になるようにわけた。【】内は各群の得点分布。

将来うまく育つか心配している母親の子どものほうが、ストレスサインのひとつである甘えの様子を増加している。

甘える様子の増加は、母親が気づきやすく比較的軽いストレスサインのひとつであることから、ここでは取り上げて分析した。

●子ども 母親の感情の影響



震災直後、「甘える様子」が「増えた」と回答した母親を、「子どものことでどうしたらよいかわからなくなること」があるかどうかでみたところ、「よくある+時々ある」と答えた母親は39.5%、「あまりない+ぜんぜんない」と答えた母親は30.7%と8.8ポイントの差があった。調査時点では、数値自体は下がっているもののこの傾向は続いており10.0ポイントの差があった。「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」があるかどうかでみた結果も、同様の傾向がみられた。

Q. 震災の影響で、お子さまの次のような言動の変化がみられましたか。それぞれお答えください。

首都圏

あなたに甘える様子(表情、しぐさ、言葉、行動など)が増えた

(%)

- 子どものことでどうしたらよいかわからなくなることよくある+時々ある(1,056)
- 子どものことでどうしたらよいかわからなくなることあまりない+ぜんぜんない(1,492)

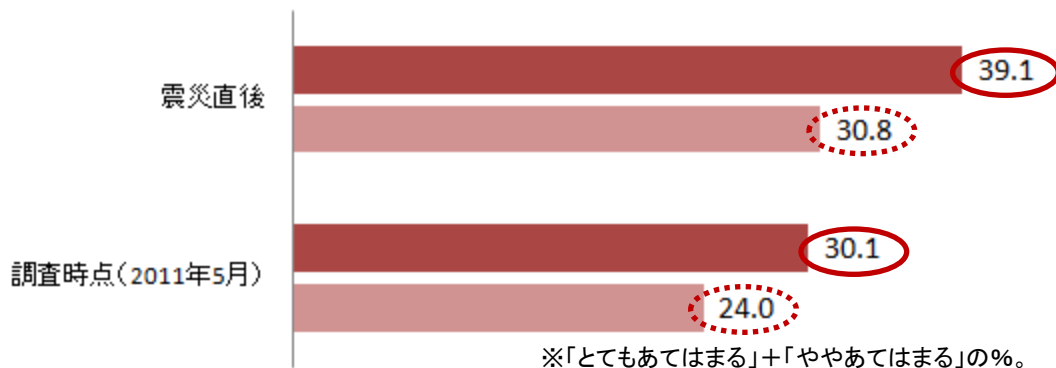


首都圏

あなたに甘える様子(表情、しぐさ、言葉、行動など)が増えた

(%)

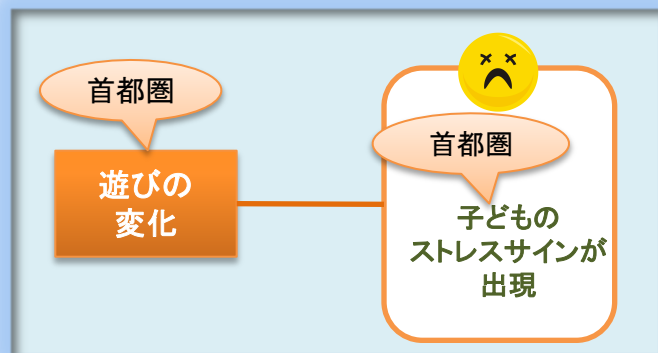
- 子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になることよくある+時々ある(1,094)
- 子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になることあまりない+ぜんぜんない(1,454)



※「とてもあてはまる」+「ややあてはまる」の%。

☞ 首都圏で屋外遊びや友達と遊ぶ時間を減らした子どもほど、ストレスサインである「甘え」の様子が増加した。

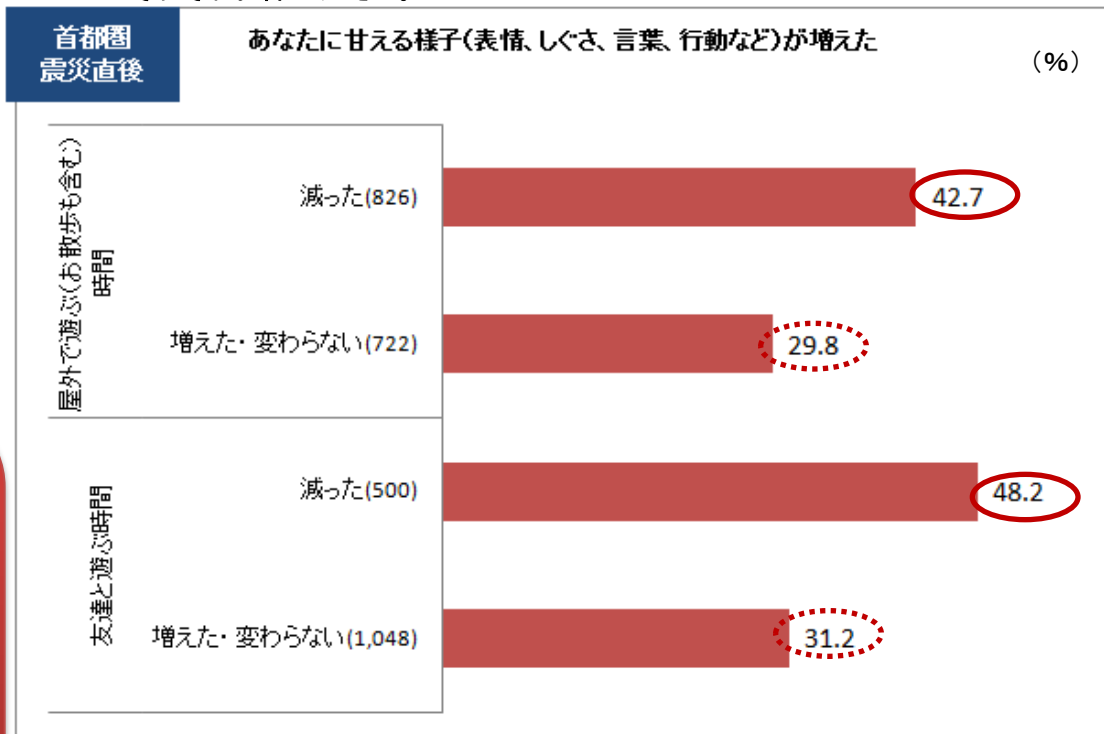
●子ども 遊びの変化とストレス



震災直後、「屋外で遊ぶ時間」が「減った」と回答した子どもの42.7%が、ストレスサインの1つである甘えの様子が増えたと回答したのに対し、「増えた・変わらない」と回答した子どもでは29.8%にとどまり12.9ポイントの差があった。「友達と遊ぶ時間」についても同様の傾向があり、こちらは17.0ポイントの差であった。

調査時点では、数値自体は下がっているものの、この傾向は続いており(図表省略)、外で遊べない、友達と遊べないといった状況が、子どもにとってストレスを与えていることがうかがえるだろう。

Q. 震災の影響で、お子さまの次のような言動の変化がみられましたか。それぞれお答えください。



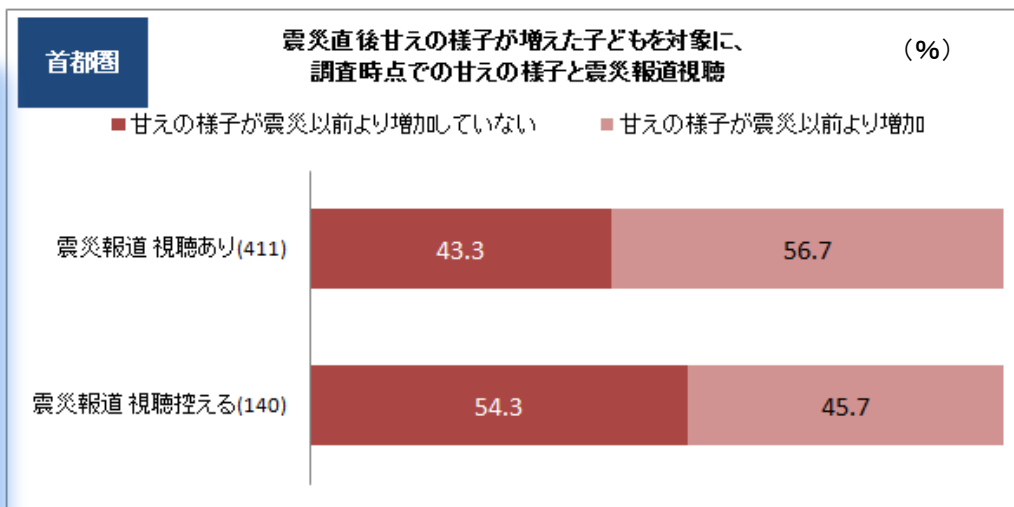
※「とてもあてはまる」+「ややあてはまる」の%。

震災報道の視聴を控えたり、防災について親子で話すことで、甘えの様子を増加を

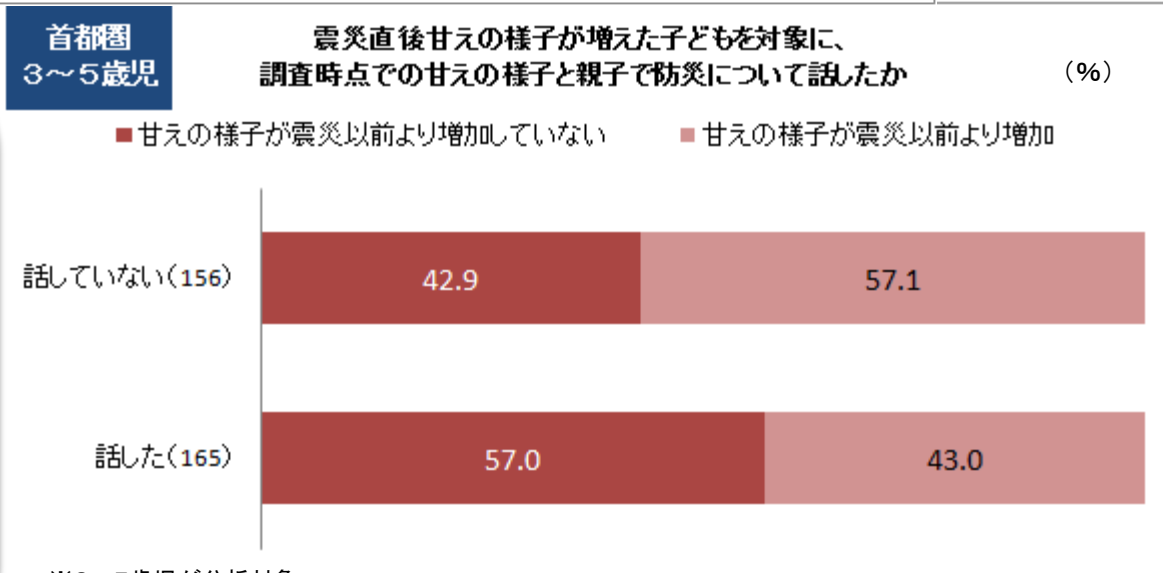
●子ども 心を安定させるヒント



首都圏で震災直後に震災以前より甘える様子が増加したと回答した子どもを対象に、調査時点（震災約2か月後）では震災以前より甘える様子が増加したかどうか、震災報道の視聴スタイル別でみると、震災報道を視聴していた群より、配慮して控えた群のほうが「増加していない」割合が11.0ポイント高かった。また同様に、3歳以上の子どもについて親子で防災について話したかどうかでみると、防災について話していない群より、話した群のほうが「増加していない」割合が14.1ポイント高いこともわかった。以上から、震災報道を大人が意識的に控えたり、コミュニケーションのとれる子どもに対しては、親子で防災について話すことが、子どもの心を安定させる一面があるといえるだろう。



※震災直後2週間「甘える様子が増えた」に「とてもあてはまる+ややあてはまる」と回答した人のみ分析対象。
※もともとテレビは見ないと回答した人は分析から除外。
※「震災報道視聴あり」は、「お子さまと一緒に部屋で、震災関連の報道をみていた」と回答した人、「震災報道視聴控える」は、「お子さまに震災関連の報道を見せるのはよくないと思い、またはお子様が嫌がったので、子ども向け番組をみせたり、できるだけテレビを消して過ごした」と回答した人を指す。



※3~5歳児が分析対象

※震災直後2週間「甘える様子が増えた」に「とてもあてはまる+ややあてはまる」と回答した人のみ分析対象。
※「防災について親子で話した」とは震災をきっかけに親子で話したことについて「災害時の家族の取り決め」と「災害から身を守る方法」について「すでに話した」を選択したかどうかでわけた。

調査結果を 振り返って

東日本大震災の甚大な被害に加え原発事故の収束の目途が立たない現在の社会状況は、就学前の小さな子どもたちを抱える親たちにとって、さまざまな心配を与え、不安とストレスが降りかかっていることがわかりました。さらに首都圏では、小さな子どもたちからも、ストレスのサインである甘えの増加がみられました。しかし残念なことに、母親たちが抱える心配は個人で解決できないことも多く、すぐに不安とストレスを取り除くことは難しい状況です。

このような状況の中、子どもの父親である夫からの協力や、地域のつながりのネットワークが多い母親は、比較的子育てに対するいらいら・不安が少ない傾向がありました。このことから、今の母親たちの不安とストレスを少しでも改善するために、夫や地域のネットワークといった母親を取り巻くサポートが十分に機能することが望まれます。また、母親たちも日頃からネットワークを持ち、社会的サポートを確保しておくことが、非常時への備えとして大切なことだといえるでしょう。

そういった大人同士のサポートによって、まず母親たちが心を安定させ、子どもたちと向かい合うことが重要です。加えて、子どもが不安がるときには、大人たちが意識的に震災報道を視聴させないようにすることや、コミュニケーションのとれる年齢の子どもに対しては、非常時の対策や取り決めを話し合うことで、気持ちを落ち着かせることができると考えます。